

## 2013年度 中央大学 卒業式・修士学位授与式 式辞

理工学部物理学科・理工学研究科物理学専攻 主任 香取眞理 2014年3月24日

ご卒業おめでとうございます。修士の皆さんは学位授与おめでとうございます。

ご列席のご家族の皆様もさぞお喜びのことと存じます。おめでとうございます。

さて、それでは皆さんは物理学科という学部、あるいは物理学専攻という修士課程でいったい何を学んだのでしょうか。物理学科では、力学、電磁気学、熱力学といった19世紀までに完成されたいわゆる古典物理学を学び、そのあと量子力学、統計力学、あるいは相対性理論という20世紀以降に発展した現代物理学を学びました。物理学実験で実験レポートを作成し、計算機実習ではプログラミングの手法を身に付けました。卒業研究では研究室に所属して何らかの研究活動を行ったことでしょう。大学院修士課程では講義よりも、研究室単位での実験やセミナーが忙しく、他大学や学外の研究・教育機関に出かけることもありました。学会や研究会で発表を行った人もいるでしょう。中には海外出張をして国際会議で研究成果を発表した人もいます。そして、修士論文作成・提出、2月の審査会発表を経て、今日、修士の学位を授かったわけです。ご苦労様でした。

少し話がずれますが、私が昔、とても興味を持って読んだ本に、立花隆の「宇宙からの帰還」というものがあります。立花隆は有名なノンフィクション作家ですが、この本は、1985年のものであり、彼の初期の著作に分類されることとなります。彼はNASAの多くの宇宙飛行士にインタビューを行い、この本を書きました。ご存知のように、大気圏を脱出し月への着陸に成功したNASAの宇宙飛行士たちは長年にわたる訓練に耐え、緻密な計画に従って宇宙飛行のミッションを遂行し地球に帰還しました。彼らの宇宙空間における行動はすべて記録され、もちろん膨大な身体的・生理的なデータも残されています。しかし、彼らが宇宙に行って帰ってきたことによって、どのような精神的な変化を経験したかについて、系統的に質問した人は立花より前にはいなかったということです。これはどのくらい知られているか分かりませんが、NASAの宇宙飛行士として活躍して引退した後、画家や宗教家になった人が何人もいます。彼らは宇宙空間において特別な、ある種の宗教的な経験をしたことをインタビューで答えています。他方、多くの宇宙飛行士は、宇宙での経験はそれまでの地上での訓練、たとえば巨大なプールの中でのシミュレーション訓練そのものであり、特に何も感じることはなかったという回答をしています。立花の興味は、その違いは何かということでした。

この本を読んでから、もうずいぶんと経つので詳しいことは忘れてしまったのですが、立花の分析結果は次のようなものだったと記憶しています。宇宙飛行士が宇宙空間に滞在している間に、何らかのトラブルのために数時間にわたって地球との交信が経たれた状況に置かれたもの、例えば宇宙遊泳中にトラブルがあり宇宙船の船外に一人取り残された経験などがあると、大きな精神的変化を経験したということです。ただし、大きな事故のあと奇跡の帰還を果たしたアポロ13号のように、トラブルの度合いが大きく宇宙飛行中に対処すべきことが多すぎてその処理にだけ追われた宇宙飛行士は、むしろ精神的な変化は少なかったようです。

さて、なぜ私がいま「宇宙からの帰還」についてお話ししたか想像がついたことと思います。皆さんが大学に入学したのは高校を卒業したときですから未成年でした。もちろん大学と言っても教育期間ですから、特に世間から隔離されている訳でもありません。それまでの学校と同じです。しかし、小学校、中学校、高等学校は毎朝親に送り出され、学校にはクラス担任の先生がいて・・・というわけで、一言で言えば、皆さんはただの「生徒」でした。勉強する内容も、国語、英語、数学、理科、社会というわけで、簡単に言えば皆同じようなことを一通り勉強したわけです。ところが大学では、「物理学」というなんだかとても難しい学問を自分で選び、勉強し、大学院ではその中のあるテーマにこだわってとことん研究したわけです。大学生あるいは大学院生として特別なミッションに携わってきたわけです。そして、さまざまな科目や課題を成し遂げて、今日、無事に修了しました。その間、標準的に言うと学部では4年、修士も含めると6年間で過ぎました。長い年月でした。君たちもそれなりの年齢になりました。

もちろん君たちは、「宇宙から帰還」したわけではありません。また、1週間後の4月からはまた新たなミッションが待っていることでしょう。しかし、私がここで申し上げたいのは、これはやはり一つの節目であることは間違いないので、「何の勉強をしたか」「どのような単位をとったか」「修士論文のタイトルはなんであるか」といった正規のミッションの結果を思い出すだけでなく、18歳から22歳、あるいは24歳（標準的にいってですが）といった子供から大人への移行期間を過ごす間に、精神的にはどのような変化を経験したか、について考えを巡らせて欲しいということです。

友人と楽しかったこととか、順調にうまくいったことなどは、もちろんよい思い出でしょうが、この話題においてはあまり重要ではないと思います。また、本当に困ったことがあり、それを知り合いや先生に助けてもらって大変有難かった、自分もいつかその恩返しが出来ようになりたい・・・というような経験も、確かに大切ですし、美談としては申し分ありませんが、多分これは「成功した失敗」と言われるアポロ13号の類でしょう。他の人にはなかなか理解さえしてもらえないような、特別で些細なことと思われそうな、しかし自分にとっては大きな障壁にぶつかり、その何らかの困難を自分自身の工夫と努力でなんとか乗り切った、そういった経験がここでは重要に思われます。若い人たちの間で好感度の高い言い回しの一つに「自分なりに頑張っ・・・」という言葉があります。しかし、多分、こういった困難は「自分なりに頑張る」くらいでは解決しなかったことと思います。「自分なりに頑張ったつもりなのに評価されず、その後はとにかく成果を得るために四苦八苦した・・・」というようにその経験談は続くものだと思います。さて、そのような困難を自分の知恵と力で乗り切った間に、何を考えたか、何を得たか？というのがここでの問いになります。

学部を卒業した方の中には4月からは「引き続き」大学院へ、という人も多いです。また、せっかく「大学や大学院からお家に帰還」した諸君も4月からの会社勤めですぐに忙しくなることと思います。しかし、この2、3日は「地球に帰還」したパイロットの気分で、この4年ないしは6年間の自分の精神的な成長の度合いについて、考えを巡らせてみてはどうでしょうか。